

白石 元治郎 小伝

Motojiro Shiraishi



白石元治郎氏は、慶応3年（1867年）8月福井県西白河郡に前山孫九郎氏の次男として生まれ、明治3年に白石家の養子となった。その後東京大学予備門を経て帝国大学法科大学に進み勉学の傍らボート部のキャプテンとしても活躍した。明治25年卒業と同時に浅野総一郎氏が経営する浅野商店に入社し、翌26年に石油部の初代の支配人となり、事業家としての第一歩を踏み出した。その後同じ浅野系の東洋汽船株式会社に転じたが、その専務時代に学部こそ法科と工科と異なるが、同じボート部員であった学友の今泉嘉一郎氏と再開したのが奇縁となって、わが国初の民営製鉄会社の創立に尽力し、明治45年6月日本鋼管株式会社を設立し初代社長に就任した。

当時、鋼管は国内の需要量が増加していたのに係わらず全量を輸入に依存してきたが、その国産化に着目したのが大倉喜八郎氏で、八幡製鉄所の主席技師であった今泉氏（後に大倉組の製鉄事業顧問）の助言によってドイツのマンネスマン方式による継目無鋼管の製造計画を進めたが、計画の実施は主として銑鉄の安定入手先の確保が問題で難航した。

こうした時期に白石氏と今泉氏を結びつけたのは、白石氏がインドから持ち帰ったベンガル製鉄会社製の一塊の銑鉄であった。浅野商店、東洋汽船株式会社を通じて国際的な視野を広げた秀でた事業家の白石氏と製鉄技術の総師であった今泉氏との強力なコンビがこうして生まれた。この一年後には日本鋼管株式会社が誕生した。

会社設立はもちろん、わが国初の継目無鋼管の製造に成功するまでの道程は苦難の連続であったが、全身全霊をあげてこれに打ち込み、私財をもなげうって鉄の民営化に取り組んだ。もちろん大倉喜八郎氏、岸本吉右衛門氏、大川平三郎氏、浅野総一郎氏、渋沢栄一氏ら財界首脳の支援はあったにせよ、日鉄合同には参加せず民営一筋を貫いた企業家精神は、鉄鋼業発展に新時代を築いた先駆者として永遠にたたえられよう。

氏は昭和20年12月に逝去された。日本鋼管株式会社は同社創立70周年に際し初代社長故白石元治郎記念のため金4,000万円を記念資金として昭和56年日本鉄鋼協会に寄贈されたので、本会では白石元治郎記念資金を設立し、その資金利子をもって鉄鋼業の進歩に貢献する関連分野の各種技術に関連する講座（白石記念講座）を開催している他、平成12年からは白石記念賞を授与している。